

歴史の流れに沿った日越関係に関する資料

チュオン・トゥー

ベトナムと日本は同じアジアの国で、季節風（モンスーン）気候の地域に属し、水稻栽培の盛んな国である。

ベトナム人と日本人の間には、風習・習慣・信仰宗教に関して「同様」であり「同調」できる点が昔から数多く存在していた。特に、両国で発展した儒教とともに、仏教の布教も扶桑国（日本）と東洋半島（インドシナ半島）で早くから行われていた。両国の文化的交流も早くから始まっていた。「日本史」の資料には、752年の東大寺大仏開眼供養会にベトナム僧仏哲が招かれ来日したことが記録されている¹。また、交州（古代ベトナムの名称）を訪れた最初の日本人が阿倍仲麻呂であったこともわかっている。阿倍仲麻呂は遣唐（中国）留学生であったが、唐で科挙に合格した後、日本に帰国せずに、「朝衡」（唐名）と名乗り唐の朝廷で昇進を重ねていた。753年、55歳の時に、唐詩で有名になった。数多くの唐詩人や大臣と親交があったらしく、皇帝の図書館を管理する秘書監、および宮門を守衛する兵士を管轄する衛尉卿にまで昇進した。

761年（唐の玄宗）に、左散騎常侍から安南節度使としてベトナムに赴き総督を務め、中国の雲南省とベトナムに居住していた少数民族間の国境問題に関わる紛争の調停に貢献した。767年に中国に帰着して72歳の生涯を閉じている。

その後、数百年にわたり、日越関係を直接記す資料はない。13世紀後半に、蒙古帝国と元朝が中国の中原を統一支配した後、アジア大陸とヨーロッパ大陸まで勢力を広げ始め、ベトナムと日本にも蒙古への服属を求めて侵攻軍を送った。蒙古帝国と元朝は、ベトナムには三度（1258年と1285年、および1286年）侵攻したが、いずれも陳朝に敗れた。日本へも二度（1274年と1281年）軍を送っている。大日本史によると、1268年から、クビライの派遣によって、使節が何度も来日し、蒙古への服属を求めるなど外交にかかわる内容の国書を執権の北条時宗に送ったが拒否された。1274年に、クビライは900の戦艦と33000人の兵を日本の対馬、壱岐、筥崎に上陸させ、下関海峡に近い筑前国の平戸島を攻撃したが、ここでの日本軍の攻勢と台風により元軍は上陸できずに撤退した。1281年、クビライの命令下で、15000人以上の元軍が再び日本に向けて出発した。元軍が九州の筥崎と肥前国の鷹

1 Trinh Tien Thuan. “Quan he van hoa Nhat - Viet thoi chua Nguyen o Dang Trong.” 『ホーチミン市教育大学』第17号、通信科学出版社、1997年4月、85頁による。

島、平戸島に襲来すると、1281年8月16日の暴風雨に遭遇し戦艦は全て沈没した。その後、元軍は日本軍により激しく撃退され、壊滅的な損害を受けた。1283年、クビライの指示によって、アタカイ（阿塔海）は他の左右丞相と共に日本再侵攻を急いだ。しかし、1286年に、クビライは日本侵攻計画を取りやめて、中華大陸とアジア大陸に目を転じた。日本侵攻を諦めたクビライは「日本は今だかつて我が国を侵略したことはない。今は交趾（ベトナム北部の国、陳朝大越国）が我が国の辺境を侵している。日本のことは置いておき、専ら交趾を事とするがよい²」。ただし、「交趾が我が国の辺境を侵している」といったのは誹謗中傷であった。正確には、1285年にベトナム軍と人民の攻勢により元軍がチョンヅオン（Chuong Duong）、ハムツー（Ham Tu）、タンロン（Thang Long）、テイケト（Tay Ket）にて敗北したので、その屈辱を晴らす目的で再びベトナムを攻撃したのである。そのような事情から、日本は、間接的に大越国の勝利の恩恵を受けたといえる³。

* * *

日本史を研究する際に、一つ注意すべき点がある。日本の地理的条件と外国との経済交流には密接な関係がある。様々な面で外国との経済的関係を持たなければ、これまでの日本の発展はなかったであろう。ダオ・ズイ・アイン教授によると、「15世紀の初めから、数名の日本人が商売のためにベトナムに来た⁴」とある。

中世における日本と東洋の関係についての研究を見ると、N. ペリー氏は、日本商人の商船が1583年にベトナムのダナンに寄港したと書いている。

豊臣秀吉の時代（1536～1598）には、白濱顕貴という日本商人が、5隻の商船を従えてベトナム順化省のクアヴィエト（Cua Viet）港（現在は Quang Tri 省）を訪れた。グエン朝国史官（大南寔録前編）には、この日本商人のことが詳しく書かれているが、西洋の人間であると間違っていて記録されている。これは、グエン・ホアン都統使（グエン・ホアン公）から幕府の徳川家康（家康公）への通書、および家康公からグエン・ホアンノ公への返書という、二通の書簡を通じて明らかになった⁵。この二通の書簡のやりとりから見ると、日本とベトナム両国は、良好な外交・貿易関係を長期的に築きたかったということがわかる。

日本の統計によると、1604年から1634年までの間で、東南アジアとの貿易を目

2 Ha Van Tan and Pham Thi Tam. *Cuoc khang chien chong xam luoc Nguyen - Mong*. ハノイ社会科学出版社、1968年、248～249頁による。

3 Matouwaki Ugara. *Ba coc riou chuc mung*, Nguyen Truong が収集し翻訳した資料、『日本研究雑誌』1999年の4月号版による。

4 Dao Duy Anh. *Viet Nam van hoa su cuong*. (再出版) Dong Thap 出版社、1998年、78頁による。

5 Phan Ngoc Lien™. *Quan he Viet - Nhat trong lich su*. 『社会科学通信雑誌』1995年4月号、28～30頁による。

的に海外に行く商船に対する許可書 331 件のうち、121 件は到着地がベトナムであった。日本商人は金属品・剣・鎧などをベトナムに輸出し、ホイアン (Faifo) 港でシルク商品・木像・古木・琥珀・石英・漆器箱などを購入した。ホイアンに居住した日本人は 700 人ほどで、別の地区において日本風の生活様式で暮らしていた時期もあった。彼らの居住地区には建物も多く作られており、ホイアンにおける中国人地区にも劣らないほど賑やかであった。1618 年にホイアンを訪れたポルトガル人のクライトフォロ・ボーリ神父は、自分の「記事」に次のように書いている。「ベトナム南部における商人は主に中国人と日本人であり、南部の港沿いの地区の一つで商売をしていた。それはホイアンと呼ばれる大きな商業地区で、中国人の商売町と日本人の商売町からなっていた」⁶。

1635 年より、日本が日本商船の外国渡航を禁じたため、日本とベトナムの貿易は衰退したが、当時ホイアンに住んでいた日本人は、やむを得ずそこに残って生活し続けた。在ベトナム日本居留民の中で特に有名なのが、荒木宗太郎と Shicho Eikechi の二人である。1626 年に宗太郎はグエン公である阮福源の娘、Ngoc Van 姫と結婚した。後年、彼女は自分の夫の故郷である長崎に移住して、1643 年に生涯を終えた。今も長崎には彼女を祀った神社が残されている。また、長崎歴史文化博物館には、彼女がベトナムから持ってきた「安南国鏡」と刻まれた貴重な鏡が現在も保管されている。

そして、名古屋市にある茶屋家の子孫の家には、グエン公が贈った観音仏像、およびダナン海港に入港しているホイアン行きの茶屋家の商船を描いた絵が現存している。また、角谷家の子孫の家には、山羊の皮で作った航海図が保存されており、その海図には、日本の長崎港とベトナムのホイアン港をつなぐように点々と針穴が刻まれている。

両国の貿易交流が始まった当初から、グエン公の阮福源は、日本商人がベトナムに居留し商売ができるように配慮していた。また、グエン公の阮福湊 (Ngai 王、1687 ~ 1691) も、日本人の伝道師 Barthélemy d'Acosta を自分の医師として招聘した。鳥羽商人は Sai 王の阮福源によって養子と見なされ、貿易する上での様々な優遇を受けることができた。経済的な利益のほか、このような関係は、この時期の両国の友好関係を発展させるのに大いに貢献した。⁷

幕府が日本商船の海外渡航を禁じた 17 世紀末から、両国の貿易はかなり減衰したが、グエン公はなおも、貿易の再開、および金融能力を強化するための銅貨輸入を求める手紙を江戸幕府に送っていた。

18 世紀、明治以前の日本はベトナムと同様に「閉館鎖国」の国であった。しかし、

6 25 nam quan he Viet · Nhat. 社会科学出版社、1999 年、74、78 頁による。

7 上記 Phan Ngoc Lien の同じ資料による。

西洋帝国の脅威に対して、日本では、資本家階級に代表される進歩的な人々が国を改革し、明治維新が起こった。それから、日本は徐々に発展して、西洋諸国の攻撃に対抗できる隆盛な資本国となった。1894年の日清戦争での勝利、さらに1904年の日露戦争での勝利という前例のない出来事は、「白人の大国を驚愕させた」⁸。

この二つの戦争における日本の勝利は、世界に大きな影響を与えた。長期にわたって白人により蔑視されていたベトナムも、日本が黄色民族の救い手となり、白人帝国による統治から解放してくれると信じた。

当時、愛国者のベトナム人ファン・ボイ・チャウは、「維新会」を創立して、ベトナムの青年を日本に留学させる「東遊運動」を興した。この運動により、1905年から1909年までの4年間に、約200人の優秀なベトナム青年が選ばれ、日本に留学した。そして軍事・政治・言語科学といった学科を振武学校や同文書院で学び、大隈、犬養、柏原ら日本人の人士、知識者、政治家によって親切にもてなされ、腹心となって協力した。東遊運動は、愛国心を有する情熱のある新しい革命幹部を育成して20世紀初期の民族解放運動に大いに貢献し、国の解放に向けて尽力したため、ファン・ボイ・チャウの革命事業と維新会に対して偉大な功績を残したと見なされている。

ベトナムの革命家は東遊運動の活動内容を理解して、追求する民主資本革命の革新的な思想を会得した。

また、東遊運動を介して、ベトナムの革命家は東京で世界の革命家と接見し協力関係を結び、畦越連盟会や東亜同盟会など国際的な革命組織を設立した。「圧迫されたアジア諸民族連合会」の思想はこの東京から芽生えた。

東遊運動は、様々な方面で、特に近代の日越友好関係において、金字塔を打ち立てた。日本政府の公式な見解では、東遊運動を直接支援できなかったが、「同文同種」といった感情を引き続き涵養し、特に日本の進歩的な人士、知識者と日本の民衆は東遊運動に絶え間ない支援を送った。ファン・ボイ・チャウとベトナム人民は、浅羽佐喜太郎先生、柏原文太郎、宮崎滔天をはじめ、その他多くの人たちからの温かい支援を絶対に忘れてはいない。

東遊運動は効果を上げていたが、フランスは日本政府と結託してこれを弾圧し解散させた。1909年3月には、ベトナム人留学生全員、およびファン・ボイ・チャウやクオン・デーら指導者が日本国外への退去を命じられた。状況が厳しくなり、ベトナムに帰国する経費までもが問題になってきた。日本に密かに在留して勉学を続ける留学生も数人いたが、大変な苦勞を背負った。

当時、浅羽佐喜太郎先生は、以前ベトナム人留学生に対して抱いたのと同じ寛大な心で、大事業のためにファン・ボイ・チャウに1700円もの大金（小学校長の月給が18円）を渡し支援した。まさに浅羽佐喜太郎先生は東遊運動の大恩人であった。

8 上記 Phan Ngoc Lien の同じ資料による。

支援を受けて、ファン・ボイ・チャウは日本から退去した後、中国に渡って活動を続けた。そして、中国での逮捕から10年以上経た後、同じく日本で活動した数人の友人とともに、世を去った浅羽先生の故郷である静岡県東浅羽村を訪れ、梅山に石碑を建てている。

ベトナムの東遊運動期における日越関係史を研究し理解すると、さらなる多様な証跡が発見された。ファン・ボイ・チャウが指導した東遊運動期の日越関係および東遊運動が獲得した成果は大きな引き金となり、19世紀末に失敗した勤王運動とホーチミンとベトナム共産党が指導した20世紀の反フランス闘争運動との架け橋として、歴史上、重大な意味を持っている。

上記に述べた通り、東遊運動がフランスと日本政府の結託により解散させられ、留学生たちが日本国外に退去させられたことにより、近代史上最も有意義で積極的な日越交流関係は終わりを告げた。

しかし、1907年6月10日に締結された日仏協約が有効になり、第一次世界大戦、特に20世紀の30年以降、日本は帝国主義・ファシズム・軍閥政治の国になり、徐々に平和を愛好する人民と民族主義および社会主義の国と敵対するようになった。東洋とベトナムへの対策から、日本のファシズムと軍閥政治は敵となった。

第2次世界大戦後、日本軍は同盟軍により武装解除され撤収したが、一部の日本人兵は（様々な理由で）ベトナムに残り、ベトナム人に受け入れられ、「新しいベトナム人」と呼ばれ、ベトナム人の友人となった。ベトナム北部が解放された（1954年）後、日越両国の間で結ばれた協約に従って、大部分のこの「新しいベトナム人」は日本に帰国した。

1954年～1975年までの時期、ベトナムは北部と南部に区分され、日本政府はベトナムの南部（ベトナム共和国）と主に経済関係を維持していただけであった。

第2次世界大戦後、日本はアメリカに深く依存していたため、1957年11月から日本政府はサイゴンの政権を認めた。

1973年9月21日にパリにおいて、日本とベトナム（ベトナム民主共和国）との外交関係が樹立された。この新たな関係に基づいて、日本政府は、140億円までのODA援助金をベトナムに与えた。しかし、1978年12月に、ベトナム軍が「赤いクメールによる種族消滅」という惨劇からの救出を目的としてカンボジアに入ると、日本政府はベトナムへの経済的援助を打ち切った。

その後、1989年にベトナム軍がカンボジアから撤収し東西紛争が解決されると、日越関係は徐々に元の状態に戻っていった。

ベトナムのドイモイ政策は第6回共産党大会（1986年）から適用されたが、1992年以降、両国間の外交・貿易関係は復元し発展を遂げた。さらに文化・教育の面に至るまで交流活動が様々な形態で効果的に展開されてきた。

歴史の進展を顧みると、地理的に近く、歴史と文化の面で類似点が多くあったため、日本とベトナム両国の関係は早い時期から生まれ、数世紀にわたって維持されてきたことがわかる。時の流れの中で衰退する時期もあったが、両国間の伝統的なこの友好関係は、東南アジアと東アジアにある両国の協力関係と両国民のより深い相互理解に不可欠な基礎を築いた。